

Psycholinguistics の英語教育への 効用に関する一考察

—Language Acquisition との関連を中心に—

船 津 好 平

I はじめに

戦後のわが国における英語教育がアメリカで著しい発展を続けている言語学の影響を受けていることは周知の事実である。確かに1940年代から1950年代にかけて、構造主義言語学 (Structural Linguistics) が盛んに英語教育へ応用され (Fries, Lado, Shen, Roberts, Finocchiaro, Stevick…), その貢献は内外に高く評価された。Hill, Twaddell, Fries, Lado 等知名の言語学者や言語教育学者が相次いで来日するにおよんで、わが国の英語教育、特に Primary level の英語教育においてその影響が顕著となった。そしてその成果も決して小さなものではなかった。したがって現場で英語教育に従事する者たちの間には新しい英語教育は新しい言語理論に立脚しなければならないという思想が支配的となり、英語教育の発展が言語学の発達に全面的に依存するかのとき錯覚に陥っているように思われる。現にアメリカ言語学界の主流が構造主義一派の手から Chomsky を中心とする変形生成文法一派に移るや、すばやくその変形生成文法理論を英語教育に応用しようとしたり、その応用を期待する動きが見られる。

しかしながら、ヨーロッパの言語教育学者たちはこのような Linguistics に著しく傾斜する言語教育のあり方に対してかなり批判的である。例えば Strevens は “The Purposes of Linguistics are not identical with those of Language Teaching” と述べ、Linguistics の立場と Language Teaching の立場を峻別し、¹⁾ Christophersen は Linguistics 一辺倒の言語教育をたしなめ、言語教育は、むしろ心理学者の協力を仰ぐべきであると主張し、²⁾ また Renzo Titono も同様な主張を彼の *Studies in the Psychology of Second Language Learning* の序文で述べている。³⁾ さらにまた A. V. P. Elliott は変形文法理論を直接英語教育に応用する態度を批判している。⁴⁾ このように

ヨーロッパの言語教育学者たちが主張するとおり、われわれが英語教育の発展を志向する際、それを言語学の成果に全面的に依存する態度は避けなければならないだろう。なぜなら言語現象の解明はただ、言語学によってのみ成就されるものではないからである。

言語現象の解明には大別して二つの立場があると考えられる。一つは言語を社会的素材として存在する一定の構造組織として究明していく、いわゆる言語学 (Linguistics) の立場であり、ほかの一つは一定の行為として、個人から発せられる言語行動 (Verbal Behavior) を究明する心理学的立場である。かくして、言語教育を考える者はこれら二つの立場の成果を見、言語教育への応用の可能性を判断しなければならない。しかし都合なことに、アメリカにおいて、言語学の立場と心理学の立場とが歩み寄り、複雑な人間の言語現象を解明するために両者の交流を計かる新しい学問分野が誕生した。これが Psycholinguistics である。したがって Psycholinguistics の成果から英語教育への直接的示唆を期待できよう。

本稿では Psycholinguistics の歴史的背景とその特質を略述し、そしてそれが言語教育、特に外国語としての英語教育にいかなる示唆を与えるかを Psycholinguists による一、二の研究をもとに探してみたい。

II Psycholinguistics の歴史的背景とその特質

すでに触れたように言語現象の解明には大別して二つの立場があり、従来 Linguistics と Psychology (the psychology of language) とがそれぞれ別個に追求してきたのであるが、言語現象の徹底的究明には両者の相補的研究体制の必要が確認され、アメリカの Social Science Research Council が1952年に Language Behavior の立場に立つ心理学者および言語学者を集め言語学心理学合同委員会を設立した。同委員会の構成メンバーは心理学側からの Osgood, Carroll, Miller そして言語学側からの Sebeok, Lounsbury, Greenberg 等であった。翌年の1953年、Indiana 大学で開催された Linguistic Institute と並行して初の Psycholinguistics のセミナーが開かれ、スタッフメンバーのほか、Susan Ervin, Leonard Newmark, Sol Saporta, Donald Walker, Kellogg Wilson 等が参加、言語に対する三つの異なったアプローチ、すなわち、(1)言語を組織的に相互関連する単位の構造とみる言語学者の立場、(2)言語を sign と behavior にかかわる習慣組織とみる学習理論者の立場、(3)言語を情報伝達の手段としてみる情報理論者の立場が検討された。

その報告が Osgood と Sebeok の手によって *A Survey of theory and Research Problems* としてまとめられたのである。⁵⁾

さて Osgood はこの第一回の Psycholinguistics のセミナーで、Psycholinguistics を次のように定義した。

“Psycholinguistics deals directly with the processes of encoding and decoding as they relate states of messages to states of communicators.”⁶⁾

Saporta が彼の編集した *Psycholinguistics* の序文の中で述べているように、⁷⁾ 言語の有する二面性（内面性および外面性）の間のかかわりあいを明らかにしようとするのが Psycholinguistics の使命なのである。すなわち langue と parole, code と message, system と process, そして competence と performance の相互関係を明らかにしながら人間の言語行動のメカニズムを追求する姿勢がとられたのである。したがって Psycholinguistics が包含する領域はきわめて広範囲にわたる。Saporta は、彼の *Psycholinguistics : A Book of Reading* に次の八項目にしたがって 関連論文を集録しているところからも、その範囲の広さを知ることができよう。

1. The nature and function of language.
2. Approaches to the study of language.
3. Speech perception.
4. The sequential organization of linguistic events.
5. The semantic aspects of linguistic events.
6. Language acquisition, bilingualism, and language change.
7. Pathologies of linguistic behavior.
8. Linguistic relativity and the relation of linguistic processes to perception and cognition.⁸⁾

この広範囲な領域の中で、英語教育に直接的な示唆を与えるものの一つとして Language Acquisition の問題がとりあげられよう。

III Psycholinguistics の一分野としての Language Acquisition

Language Acquisition とは Linguistic Ontogeny ともいわれており、人間が生まれてから成長していく間に言語をいかにして習得していくかその過程を究明する分野である。これは従来、心理学者、特に児童心理学者が主として取扱ってきた分野であり、言語学者にはあまり関心がもたれていなかったの

であるが、アメリカに Psycholinguistics の新しい学問が誕生するにおよんで、最近では言語学者の間にも注目され始めている。例えば Leonard Newmark は言語学者であるがカルフォルニア大学サンディエゴ分校で、Language Acquisition を独立した学科目として担当している。⁹⁾ 言語の構造組織を究明する言語学者は、その研究素材 (Corpus) を informant の言語行動 (Performance) に求めるのであるから、当然 Language Acquisition の分野にも無関心ではいられないのである。一方 Language Acquisition を追求していた心理学者たちも言語学が開発してくれた言語分析の手法を積極的に取り入れるようになったのである。かくして Language Acquisition が Psycholinguistics の中でもかなり大きな位置を占めているのである。このことは1966年 Edinburgh で開催された Psycholinguistics Conference の主要テーマが Language Acquisition であったことから容易に推察できよう。¹⁰⁾

Morphology の習得に関する Jean Berko の研究を眺めてみよう。Berko は

“It is evident that the acquisition of language is more than the storing up of rehearsed utterances, since we are all able to say what we have not practiced and what we have never before heard. In bringing descriptive linguistics to the study of language acquisition, we hope to gain knowledge of the systems and patterns used by the speaker.”¹¹⁾

と考へて、幼児が morphological rule をどのようにして内面化 (internalize) してゆくかそのプロセスを無意味語 (nonsense words) を用いて実験研究した。例えば plural や past tense の語尾変化の習得能力を下のような絵を用いて調べた。



THIS IS A WUG.



NOW THERE IS ANOTHER ONE.
THERE ARE TWO OF THEM.
THERE ARE TWO

19名の就学前の子供 (男7名、女12名) と小学校一年生61名 (男26名、女35名) を対象に実験したところ次のような結果が得られた。

Age Differences on Inflexional Items ¹²⁾

Item	Percentage of correct pre-school answers	Percentage of correct first-grade answer
<i>Plural</i>		
glasses	75	99
wugs	76	97
lungs	68	92
tors	73	90
heafs	79	80
cras	58	86
tasses	28	38
gutches	28	38
kazhes	25	36
nizzes	14	33
<i>Past Tense</i>		
binged	60	85
glinged	63	80
ricked	73	73
me'ted	72	74
spowed	36	59
motted	32	33
bodded	14	31
rang	0	25

なお Berko は 12名の英語を母国語とする大学院学生12名(男5名, 女7名)にも比較するために実験したが, heaf の複数化については, adults と children の間には大きな差があったと報告している。すなわち adults は knife→knives, hoof→hooves の analogy で heaf→heaves という morpho-phonemic change を行なった者が42%であったのに比べ Children は87名中3名だけが heaves を作りだしたと報告している。Berko はこの研究の conclusion の中で次の五つの点を明らかにしている。

1. Child は morphological rule を把握する能力を有している (wug という無意味語を初めて耳にして wugs という複数語尾変化の regular pattern を獲得したことから)
2. Morphological rule の達成度において preschool children と小学校一年生の間にかかなりの差がある。(preschool children の中で不規則 ring の過去形 rang を解答したものが皆無であったという事実)
3. Morphological rule の達成度において preschool children は past tense

として regular pattern (ed) をとろうとするが大人にとっては rang, clung のような不規則動詞は productive である。

4. Children は特異な pattern にしたがって新しい語を処理はしないし、また頻度の少ない語を morphological rule の model とはしない。

この Berko の考察は言語習得という点で、次の三つのことがらをわれわれに示唆する。

1. Child は Analogy の原理にしたがって言語を習得していく。
2. Child は言語を生成 (generate) する能力を有する。
3. Grammatical Rules の内面化 (internalization) は Exposure の多少に左右される。

次に Brown & Bellugi による “Three Processes in the Child’s Acquisition of Syntax”¹³⁾ と題する観察研究論文を取り上げて考察してみよう。これは Brown と Bellugi が2才3カ月の男子と1才6カ月の女子にそれぞれ Adam と Eve という仮名をつけ、1962年の10月から観察記録した結果から分析したものである。なお、Adam と Eve はいずれも大学卒の両親を持つ知識階級の子供で、観察期間中は一人っ子であったとのことである。Brown & Bellugi は Adam と Eve の Syntax 習得のプロセスを三つに区分した。まず第一のプロセスは Imitation and Reduction であるとして次のデータを示している。

Some Imitations Produced by Adam and Eve ¹⁴⁾

<i>Model Utterance</i>	<i>Child’s Imitation</i>
Tank car	Tank car
Wait a minute	Wait a minute
Daddy’s brief case	Daddy brief case
Fraser will be unhappy	Fraser unhappy
He’s going out	He go out
That’s an old time train	Old time train

この表から一目でわかるように child は Syntactic class に属する functors, つまり inflection, auxiliary verb, article, preposition, conjunction 等の機能語を omit してしまい、Semantic content を有する contentives, つまり noun, verb, adjective 等を模倣して再生することを明らかにしている。

第二のプロセスは Imitation with Expansion であるとして次のデータを示している。

Expansions of Child Speech Produced by Mother ¹⁵⁾

Child	Mother
Baby highchair	Baby is in the highchair
Mommy eggnog	Mommy had her eggnog
Eve lunch	Eve is having lunch
Mommy sandwich	Mommy'll have a sandwich

ここでは child が第一段階で習得した functors を omit した contentives のみでの表現を母親が normal な文に再生しているわけで、こうした母親の training が child の言語習得を助けていることがわかる。child の発する Eve lunch は situation によって複数の意味をもつので、母親は situation で Eve lunch の意味を理解してそれぞれ適切な形に再生しているのであると Brown & Bellugi は述べている。例えば Eve が 実際食べている場面では Eve lunch は Eve is having lunch を意味し、食器が片づけられて Eve が食卓を離れたときに発する Eve lunch は Eve has had her lunch を意味するので、母親はその言葉の使用される場面に match した正しい utterance を与えるのだとしている。

第三のプロセスは Induction of Latent structure であるとして次のようなデータを提供している。

Utterances Not Likely to Be Imitations ¹⁶⁾

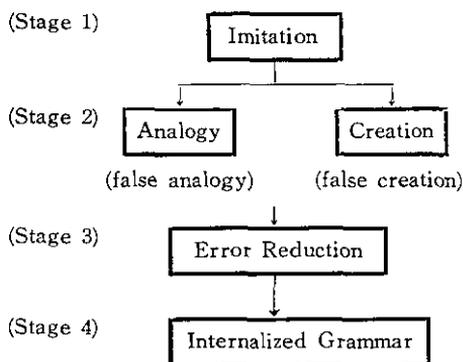
My Cromer suitcase	You naughty are
Two foot	Why it can't turn off?
A bags	Put on it
A scissor	A this truck
A your car	A my pencil

このデータから Brown & Bellugi は次のような見解を述べている。

"All children are able to understand and construct sentences they have never heard but which are nevertheless well-formed, well-formed in terms of general rules that are implicit in the sentences the child has heard. Somehow, then, every child possesses the speech to which he is exposed so as to induce from it a latent structure. This latent rule structure is so general that a child can spin out its implications all his life long. It is both semantic and syntactic. The discovery of latent structure is the greatest of the processes involved in language acquisition and the most difficult to understand."¹⁷⁾

つまり child はいままで 耳にしたことのない文を聞いて理解したり、また generate していく能力を有していることすなわち 潜在構造を帰納していく力が child の言語習得の上で大きな鍵となっていることを示唆している。

以上 Berko および Brown & Bellugi の研究の結果から child の言語習得過程を次のようにわくづけすることができよう。



Stage 1 から Stage 4 に至るまでにはシェーマとか、概念の習得が複雑に作用していることであろうが、外面的には上のようなプロセスを経て child は Internalized Grammar を習得することが容易に推察できる。Berko は Analogy のプロセスを明らかにし、false analogy の必然を示めしたし、また Brown & Bellugi は Creation のプロセスを明らかにし、false creation の必然を示めしたが、われわれは child がその false analogy や false creation をどのような手順で修正していくかに興味を抱かせられる。常識的に考えて Brown & Bellugi が明らかにしたように外部からの正しい model が与えられ feedback によって修正していく場合が考えられるが Carroll は Templin を引用して child の犯す文法的誤りは 3 才から 8 才にかけて減少していくことを明らかにしている。¹⁸⁾ したがって Stage 1 から Stage 4 に到達するプロセスにおけるもう一つの重要な要素として Exposure の問題が考えられる。Stage 1 から Stage 2 までの Exposure とさらに Stage 4 に至る間の Exposure の minimum requirement の提示を Psycholinguists に期待したい。

IV 英語教育への示唆

前章において child の母国語習得の過程の overt な原則が示めされたが、

この原則は外国語の習得過程においても十分とり入れられるべきものであろう。すなわち、Analogy, Creation, Exposure の三つの要素は外国語としての英語教育において欠くことのできない要素である。

Analogy については Pattern practice の形で英語教育実践の現場で具現されている。Pattern practice が Analogy の原理に基づくものであることは Nelson Brooks が明らかにしているとおりでである。

“Since as children we learn the mother tongue quite by analogy and not at all by analysis why should we not try to make analogy work for us in the learning of a second language?

This is the secret and the guiding principle of pattern practice or structure drill.¹⁹⁾

ここで注目したいのは Berko の実験データにも表われていたように不規則動詞の tense を規則化する問題である。このことは言語習得のプロセスで必然的に起こる現象として、語学教師は指導の場面で十分心得ておかねばならない。特に入門期の指導においては、むしろ false analogy が生ずるようなアプローチが大切であろう。ただ混乱を避けるために不規則動詞の導入は規則動詞の regular pattern を analogy によって習得できるようになってから行なうべきであろう。現行の中学校の英語教科書はこの点十分配慮されていないように思われる。

単なる文法的構文の機械的な Pattern practice に対しては批判はあるけれども、²⁰⁾ Analogy を具現する Pattern practice は英語学習のプロセスの中で依然として重要な位置を占めるのである。

Creation は Analogy と同様、英語教育に示唆するところ大なる要素である。Berko と Brown & Bellugi の研究から child にはいままで耳にしたことのない新しい文を生成する能力のあることが確められた。ここでわれわれが誤解してはならないのは child は必ずしも変形生成文法学者たちが考える Kernel Sentence から Derived Sentence へのプロセスで新しい文を作りだすのではないという点である。一例をあげると変形生成文法学者は “The tall boy” という utterance は “The boy is tall” という Kernel Sentence から derive されたものと考えてるのであるが child は “The boy is tall” を先に学習してから “The tall boy” を自動的に作りだすのではない。この点については Robert Allen も “Sector Analysis : From Sentence to Morpheme in English” の中で、

“A small child, for instance, will learn to say *naughty doggie* not as a transform of *The doggie is naughty* but rather as a sequence of two tagmemes which together form a ‘cluster’: a slot for a ‘modifier’, which can be filled by an adjective like *naughty* or *nice*, and a slot for the head or ‘nucleus’ of the cluster which can be filled by a noun like *doggie* or *pussy*.”²¹⁾

と述べている。child が新しい文を作りだすといっても、彼がいままでまったく耳にしなかった morpheme を作りだすと言うのではなく、すでに child が自己の memory bank の中に貯えてある文の構成要素となる part を取りだして新しく組み合わせる作業が Creation であろう。child は自己の有する言語材料を用いて自己の遭遇する situation に match した Expression を創造していくものと考えられる。

効果的な英語学習を志向するときこのような Creation の要素を実際の英語教授過程にとり入れる事が必要であろう。Pattern practice は Creation の学習過程が後に続けられることによってはじめてその merit を発揮し internalized grammar の習得を可能にさせることになるであろう。すなわち教授者は学習者をできるかぎり、real situation の中におき、そこで彼らが既習の pattern を創造的に発展させるよう彼らの有する Language Learning Capability を刺激し促進しなければならない。このことは多くの言語学者や言語教育者たちによって主張されている。

“A language is learnt through using it— yes, but through using it in situations.” – W. R. Lee ²²⁾

“Learning takes place more readily if the language is encountered in active use than if it is seen or heard only as a set of disembodied utterances or exercises.” – Halliday, McIntosh, Strevens²³⁾

“Teaching particular utterances in contexts which exemplify their meaning and use is both sufficient and necessary.” – Newmark & Reibel²⁴⁾

“The student should be encouraged to use the language in such social situations, even though he cannot do it with complete correctness.”

– K. Pike ²⁵⁾

Exposure は先にも触れたように child の言語習得に大きな影響を与える重要な要素である。これは外国語としての英語教育においても大きな意味を

もつ。すなわちそれは E. W. Stevick が “There are two very broad conditions for language learning: “exposure to the language” to be learned, and “morale”²⁶⁾ と述べているとおり言語学習の二つの大きな条件の一つであるからである。目下のところ Psycholinguists は child の言語習得 (internalized grammar の習得) に必要な exposure を数量化していないようである。われわれは Psycholinguists にこの面の研究も期待したい。W. F. Mackey によれば、外国語を学習するための必要時間数は Gouin が一年間に 900 時間という時間数を示しているが学習者とその学習する言語の違いによって差がありなかなか決めがたいとのことである。²⁷⁾ Chomsky & Miller が次のように述べていることはわれわれの関心をとりえる。

“Careful instruction and precise programming of reinforcement contingencies do not seem necessary. Mere exposure for a remarkably short period is an apparently all that is required for a normal child to develop the competence of a native language.”²⁸⁾

全面的に肯定することはできないが、ただ英語教育における Exposure の与えかたについて考えさせられるものがある。すなわち、入門期にもっと多くの Exposure を与え Pike の唱道する Nucleation を起させることも考えられるであろうし、また中学・高校・大学の 8 年ないしは 10 年間にほとんど必修として課せられている英語の時間配当の再検討も必要ではなからうか。

V む す び

Language Aquisition の問題を中心に Psycholinguistics の英語教育へのかかわり合いを求めてきたが、やはり英語教育の方向を示唆するものは大きい。そして言語教育学者たちのいままでの主張が Psycholinguistics の光にあてられてその validity が評価されうることにも明らかになったように思える。近年言語教育が関連諸科学の contribution を積極的に取り入れようとする姿勢になっているが、Psycholinguistics もそれらの中において重要な位置を占めるものである。したがって英語教育の発展を志向する者にとって今後 Psycholinguistics の発展を期待し、その成果に注目することはきわめて意義あることであろう。

注

- (1) Strevens, Peter. *Papers in Language and Language Teaching*. London: Oxford University Press, 1965.
- (2) Christophersen, Paul. "Is Structuralism Enough.?" *English Language Teaching* XXI No. 2 (1967) pp 106-114.
- (3) Titone, Renzo. *Studies in the Psychology of Second Language Learning*. Roma: Pas-Verla, 1964.
- (4) Elliott, A. V. P. "A New Look at Language Practice," *English Language Teaching* XXI No. 2 (1967) pp. 122-123.
- (5) Osgood, Charles E. & Thomas A. Sebeok. (eds.) *Psycholinguistics*. Bloomington: Indiana University Press, 1965.
- (6) _____ . Ibid. p. 4.
- (7) Saporta, Sol. (ed.) *Psycholinguistics: A book of reading*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1961.
- (8) _____ . Ibid.
- (9) University Resources in the United States for Linguistics and teacher training in English as a Foreign Language. CAL 1965.
- (10) Lyons and Wales. (eds.) *Psycholinguistics Paper*, Edinburgh University Press, 1966.
- (11) Berko, Jean. "The Children's Learning of English Morphogy," *Word* 14, (1958), p. 150.
- (12) _____ . Ibid. pp. 365-366.
- (13) Brown, Roger & Ursula Bellugi. "Three Processes in the Child's Acquisition of Syntax" *New Directions in the Study of Language*, Lenneberg (ed.) The M. I. T. Press. 1964. pp. 131-161.
- (14) _____ . Ibid. p. 137.
- (15) _____ . Ibid. p. 144.
- (16) _____ . Ibid. p. 149.
- (17) _____ . Ibid. p. 151.
- (18) Carroll, John, B. "Language Development in Children," *Psycholinguistics: A Book of Reading*, (ed.) Sol Saporta, Holt, Rinehart & Winston, 1961. pp. 331-345.
- (19) Brooks, Nelson, *Language and Language Learning*, New York, Harcourt, Brace & World, 1964. p. 152.
- (20) Newmark & Reibel, "Minimal Theory of Language Learning," Abstract for LSA Meeting (July 26-27, 1963).
- (21) Allen Robert L. "Sector Analysis: from sentence to morpheme in English," *Monograph Series on Languages and Linguistics*, No. 20 (Washington: Georgetown University Press, 1967)
- (22) Lee, W. R. *Language-Teaching Games and Contests*, Oxford University Press, 1965.
- (23) Halliday, McIntosh, Strevens, *The Linguistic Sciences and Language Teaching*, London: Longmans, 1964, p. 181.
- (24) Newmark & Reibel, op. cit., p. 1.
- (25) Pike, Kenneth. "Nucleation," *MLJ* Vol. XLIV, No. 7.

- (26) Stevick E. W. "Technemes and the Rhythm of Class Activity." *Teaching English as a Second Language*. (ed.) Harold B. Allen, New York: McGraw-Hill Book Company. 1965. p. 303.
- (27) Mackey W. F. *Language Teaching Analysis*. London: Longmans, 1965.
- (28) Chomsky & Miller. "Introduction to the formal analysis of natural languages." In R. Luce, R. Bush & E. Galanter (eds.) *Handbook of Mathematical Psychology*, (1963) vol. 2. 269-322. New York, Wiley,

gentle, peaceful, kind and life-giving. In the latter part, nature is compared to that of Basho's Haiku poems and some remarkable resemblances are seen in terms of their techniques of the Haikus' and Zen influences.

Caesar's Revenge

—Its Summary and Julius Caesar's Ghost—

Shozo TAKAHASHI

There have been many dramas of the Julius Caesar's story. An anonymous play, *The Tragedy of Caesar and Pompey or Caesar's Revenge* registered in 1606, is one of them. This play, which seems to originate not in Plutarch but rather in Appian's *Bellum Civil*, is regarded as an imitation of Malowe's and Kyd's traditional way of drama. Moreover, it is influenced by Lucan and Maret-Grévin tradition, which shows the effect by the contrast and projection of one character, Julius Caesar.

Julius Caesar's ghost in *Julius Caesar* and that in this play presents comparatively different aspects. Though these two ghosts both originate in the traditional custom of contemporary tragedy, their thought and action are quite different. Caesar and Caesar's ghost of this play have three points: one, the great contrast shown between his life and the time after his death; two, an avenging ghost of the traditional Senecan way; three, the thought of Hades and Elysium. These draw a definite line between the Caesar's ghost in *Julius Caesar* and the one in *Caesar's Revenge*. And these differences convince us that *Caesar's Revenge* is a rather poor and traditional imitation play of Elizabethan tragedy.

Some Implications of Psycholinguistics for the Teaching of English As a Foreign Language: Relating to Language Acquisition

Kohei FUNATSU

Since psycholinguistics is the joint investigation of language by

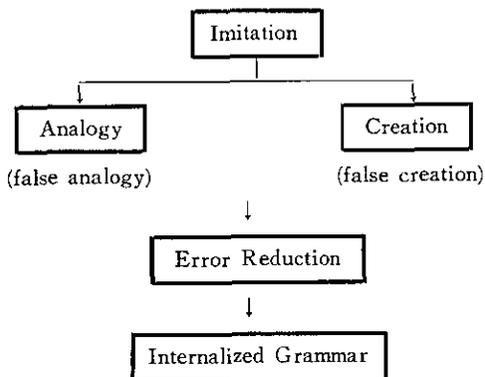
psychologists and linguists, many useful references for teaching English may be available directly from the works of psycholinguists. The range of psycholinguistics is very wide because it investigates the relationship between language and the behavioral characteristics of those who use it. Here the writer limits his presentation to the area that seems to be very applicable to teaching English as a foreign language, Language Acquisition.

Two articles relating to language acquisition are introduced:

“The Child’s Learning of English Morphology” by Jean Berko.

“Three Processes in the Child’s Acquisition of Syntax” by Brown and Bellugi.

Based on their research we can set up the frame of the process of children’s language acquisition as follows:



The writer discusses how this frame applies to the teaching of English as a foreign language.